十字路

生成ＡＩが揺るがすもの

生成ＡＩ（人工知能）を使った作品のオークション主催者に数千人の美術家が抗議文を送った話を興味深く読んだ。ＡＩツールが著作権付き作品を多数学習しており、盗用に等しいという訴えだ。

こうした作品の経済的価値が上がってきたことがあつれきの背景だろうか。確かに数千万円の値が付く作品もある。ただ、高値になるのは時代を画する作品だ。新しさが生まれる一度きりの瞬間が形になっているからこその価値であって、乱造されれば値が下がるのは想像に難くない。

芸術家が何よりも我慢できないのは真正性の喪失かもしれない。相手が模造や物まねならまだオリジナリティーを主張できる。しかし先行作品を消化した新たな創造物が大量に出てくれば、自身の真正性を証明するのは格段に難しい。複製技術がこうした事態を招くことは既に90年前に予言されていたが、現在はその最終段階と見えなくもない。

よりビジネスに近いポピュラーカルチャーであればこの時代を商機と捉えるだろうか。例えば音楽なら様々なパターンの曲を自動生成してネット上に置けば、どれかがヒット曲になるかもしれない。プロの世界はそれほど甘くないのかもしれないが。

海外の資産運用業界では大昔にそうしたやり口があった。どの運用がうまくいくか分からないから、少額ずつで様々な手法のファンドを立てる。うまくいったものはその運用実績を吹聴し、それ以外は「じゅうたんの下に隠す」。

当然これはとがめられ、今ではすべての成績を手法ごとに分け、金額加重平均を示すことが業界標準となった。だが何が本来の実績で、誰に帰属するか、再び考える時は来るだろう。どの分野でも真正性の揺らぎは起こり得る。

例えば本稿が署名者ではなくＡＩによって書かれていたとしても……。

（タスク・アドバイザーズ　社長　眞保　二朗）

日本経済新聞 夕刊 5ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。